

エデュコ **Educo**

No.53
2020年



巻頭インタビュー p.2
旭化成株式会社名誉フェロー
2019年ノーベル化学賞受賞
吉野 彰さん

知っておきたい教育 NOW p.4

- ① オンライン授業とこれからの学校教育
- ② オンライン授業とその課題

きょういく見聞録 p.8

子どもの未来応援団とは

緊急企画 コロナの教訓 p.10

- ① 「もしも」で考えるコロナ禍の先にある学校
- ② コロナ危機を教訓に

Information 北から南から p.12

地球となかよしゼミナール p.14

アートの「わからなさ」について
-アートと教育③-

Front Runner p.15

学級経営に生かす「小さな道徳授業」

ほっとな出会い p.16

イラストレーター

ひらた ゆうこ さん
HISA (ヒラタ ヒサコ) さん

「^{こうべ}実るまで 頭垂れるな 若者よ」 ～次世代を担う子どもたちへ

旭化成株式会社 名誉フェロー | 吉野 彰さん
2019年ノーベル化学賞受賞

野山を駆け回った子ども時代、自然科学への憧憬

私の生まれは大阪の千里山というところで、当時はまだ竹やぶだらけだったのですが、トンボを追いかけたり、カブトムシを取ったりして、自然の中を駆け回って過ごしていました。特に将来何になりたいという明確な夢はなかったのですが、広い意味で自然科学に興味があったものですから、どちらかといえば理系の道に進みたいと思っていましたね。

小学校の3・4年生のときに担任していただいたのが新任の女性の先生で、おそらく化学がご専門だったと思うんですけど、授業の合間に化学に関するお話をしてくださったり、マイケル・ファラデーの『ロウソクの科学』を読むよう薦められたりしました。おかげで、化学っておもしろいなあと興味をもつようになったので、その後の研究者として進む下地を作っていた気がします。

幸運の女神を味方につける

リチウムイオン電池の開発にたどり着くまでには失敗もたくさんしましたし、開発に成功してからも、市場に受け入れられるまでに多くの苦労がありました。しかし、開発にどうしても必要な材料の研究が図らずも同じ社内で行われていたり、その当時の市場の空気が追い風になつたりなど、幾度か偶然の要因に助けられているんです。

こうした目には見えない要因、セレニディピティを捕まえるにはどうすればいいか。まずはやっぱり、自分ごとことん悩まないといけないですね。恐

らく全ての人に均等に、必要な情報は与えられているはずですよ。そういう情報をうまく受信できるような心構え、いわば問題意識を普段からもっている人が情報をキヤッチしたとき、セレニディピティにつながるのではないでしょうか。悩んで悩んで、無理やり答えを引く張り出すのか、またはエアポケットみたいなのに、何も考えない空白の時間を

作ったときに急に答えがフツと降りてくるのか。閃きをもつ瞬間というのはその二通りだと思いますね。

私は忙しいときでも毎週土曜はテニスで汗を流しています。週1回くらいは、そうやって仕事とは全く離れる時間を設けることも必要なのではないでしょうか。

チームで働く際の秘訣

民間の会社で働く以上、利益追求は必須です。と同時に、チームで研究するかにはチームワークや士気の向上も大事になってくる。そのバランスをどう取るか。

私の経験上、次はあれをやるよ、これをやるよといった、いちいち会議など開かなくても阿吽の呼吸で回している関係性は必ず必要だと思うのですが、これは3人くらいまでが限界なんです。いわゆる基礎研究、探索研究ではだいたいその程度の人数なのですが、ステージが上がってくると、必然的に頭数が多く



PROFILE

1948年生まれ。京都大学大学院工学研究科修士課程修了、大阪大学大学院工学研究科博士（工学）取得。1972年、旭化成株式会社に入社後、技術畑を歩み、ガラス接着性フィルム、リチウムイオン電池などの研究開発に携わる。2004年、紫綬褒章受章。2019年、リチウムイオン電池開発の功績により、ノーベル化学賞受賞。現在、旭化成株式会社名誉フェロー。リチウムイオン電池材料評価研究センター理事長、名城大学特別名誉教授、九州大学名誉教授、ゼロエミッション国際共同研究センター長を務める。

なってくる。そこで初めてチームワークというか、一人一人のモチベーションをどうもたせるかが難しくなってくるのですが、基本的には3人体制のトライアングルで回すのは変わりません。トライアングルを構成する3人にそれぞれ2人ずつ部下をつけていけば、そこでまたトライアングルができる。ツーカーでの意見交換は小さなトライアングル内でぐるぐる回しながら、最終的に一つの大きなピラミッドにつながっていくけば、全体のチームワークになると思っていますね。どんな大きな組織であっても一人一人の事情も踏まえつつ動かないといけないので、研究活動に限らず、こうした3人のサイクルを基本にして回すのは有用だと思います。

時代の流れを読み取る力

基本的に研究開発というのは、5年・10年くらい先に、こういうものが必要とされているだろうと未来予測するところからまず始まります。5年後、10年後の



市場のニーズをどう正しく把握するか、これが一番難しい。

一つのやり方としては、仮説を立てて、それを自分で実証して、結果が出て間違っていたらそれを反省点としてフィードバックする。そしてまた次の仮説を立ててみる。常識的な予測を立てたとしても、まず外れることが多いですね。そこで時代の流れを読み取るための感受性が必要になってくるんですが、やはり感受性もセレンディピティと同じく、何かで悩んでいる人に集中するんですよ。同じ兆候が来てても、問題意識をもたない人には情報は素通りしてしまう。結局感受性というのは、そういう問題意識をもっているかどうかじゃないでしょうか。

環境配慮型社会はビジネスチャンス

いま地球規模で問題になっている環境破壊に答えを出すのは、技術屋さんや研究者だと思えます。第4次産業革命がこれから始まるんですよ。第1次産業革命で地球全体のCO₂濃度が上が

り、第2次産業革命が大量生産・大量消費の時代でした。第3次産業革命が、1995年からのIT革命。それまでの産業革命が残した負の遺産を解決していくのが、これから始まる第4次産業革命。それが恐らく2025年ころになるでしょう。ちょうどIT革命から30年後、大阪万博の年ですね。AIや無人運転の技術などを2025年くらいから本格的に普及させていこうと、各企業が標準を合わせてきています。

人工知能、AIとかIoTとか5Gといった新しい技術、これらは環境問題に対してものすごい武器になりますね。やはりそれを実現できるのは技術革新しかない。

地球環境問題は、次世代の新しい産業を必然的に生み出していきます。いろいろな新しい会社が生まれるだろうし、新しいビジネスチャンスもいっぱい出てくる。そういう意味では、これからの時代は子どもさんも含めて、絶好のチャンスになると思います。

未来の自分のために今できること

私がリチウムイオン電池の研究をスタートしたのは33歳のときでした。歴代のノーベル賞受賞者が必ず聞かれるのが、「あなたの受賞対象になった研究は何歳から始められたのですか」という質問なのですが、一昨年の時点で平均36.8歳くらいだったかな。自分を振り返ってみると、ちょうど35歳くらいのときってある意味、一番新しいことにチャレンジできる年代ですね。社会に入ってから10年目くらいで、仕事の仕方は

大体身につけていて、ある程度の権限はもらえる。新しいことに挑戦して万が一失敗しても、まだリカバリーのチャンスはある。そういう意味で、35歳くらいは大事な年だと思えるのでね、今のお子さんにたちにメッセージを贈るとしたら、「35歳の未来の自分に対して何か投資しなさいよ」と言いたいですね。勉強でも、何らかの経験を積むことでもいい。35歳くらいになるまでにいろんな力を蓄えて、一発これをやってやろうというものを見つけたら、一気にため込んでいたエネルギーを吐き出すんです。あくまでそれはスタートであって、そこから成果が出るのは10年、20年、30年先ではありますがね。

自分なりのゴールさえ確信をもって設定できれば、途中で多くの壁にぶつかるとは当然ですから、冷静に受け止めることができます。ゴールにたどり着くまでに百の壁があるとしたら、一つ壁を乗り越えたらそれだけゴールに近づいたということですから、むしろ次々と壁が現れてくれた方がありがたい。1年に1回壁が来ていたら、百年かかるからね。マラソン選手があれだけ頑張れるのも、42.195km先に間違いなくゴールがあるからでしょう。そういう意味で、ポジティブなモチベーションを自分にもたせるためには、ゴールの設定が必要なんじゃないかな。

子どもの好奇心を刺激しよう

若い頃はとんがっていた方がいいと思いますよ。「実るほど頭を垂れる稲穂かな」って言葉があるでしょう。あの言葉を裏返したら、実るまでは頭を垂れたら

いかんよと言っているんですね。それがまさに35歳前後だと思うのね。それまではピンと背筋を伸ばして、とんがって、太陽の光をいっぱい浴びてエネルギーをためておきなさい。そうして35歳くらいから新しく何かを始めて、その結果世間が業績を認めてくれたら、そのとき初めて頭を垂れなさいということですよ。座右の銘というほどでもないですが、若い人は頭を垂れたらいいじゃないかと言いたいですね。

子どもたちの理科離れが問題視されていますが、別に文系理系にこだわらず、その子の好きな道を行けばいいと思います。ただひとつ、現場の先生方をお願いしたいのは、どうか子どもの好奇心をくすぐってあげてくださいということですよ。ほんのちよつとの言葉でいいのでね。一人一人に何か関心をもたせてあげたら、その後どういう道歩んでいくのかは子どもが決めます。

今後どんどん世界が変化していく中で、独創的な考え方や個性が非常に重要になってくるでしょう。その個性のスタートポイントこそが好奇心だと思うんですよ。将来自分はどういうものになりたい、そのためには例えば英語が必要だ、歴史も勉強しなきゃとなったら、受験勉強だつて押しつけてやらされるものではなくなりますよね。将来の自分への投資なのですから。

押しつけにならないよう、こよりの先でくすぐるように、先生方はさりげなく子どもの好奇心を刺激してやってください。ね。

オンライン授業と これからの学校教育



鎌倉女子大学教育学部前准教授
全国高等学校メディア教育研究会元会長
守屋 一幸

ポイント

- ① オンライン授業では、PC 端末や児童・生徒の ICT 活用能力の不足等の他、従来の授業の課題が顕在化。
- ② 国は、ハード面の整備に加え、学習指導要領のコード化やスタディ・ログの蓄積・活用などの推進を加速。
- ③ 今後は、これらを「誰一人取り残すことのない、個別最適化された学びの実現」に生かす取り組みが重要。

オンライン授業とその課題

「新型コロナウイルス」の感染拡大にともなう臨時休業措置の中で、各学校は家庭学習支援のさまざまな取り組みを行ってきた。そうした中で注目されたのが、「同時双方向型のオンライン指導」による授業（オンライン授業）である。オンライン授業では、本来の感染防止の他、効果的な教材提示や協働学習などの利点が認められる一方で、いくつかの課題が顕在化した。

まず顕在化したのは、児童・生徒が家庭学習で使用する PC 端末や通信機器等の未整備、情報モラルや情報リテラシーを含めた児童・

生徒の ICT 活用能力の不足といった課題である。これらの課題により、各学校のオンライン授業の実施が困難となり、本年 4 月 16 日時点の文部科学省調査で「同時双方向型のオンライン指導」の実施率が約 5% となる状況が生じた。

次に顕在化したのは、「オンライン授業では雰囲気や空気が捉えにくい」という課題である。これは、大学や高校などの実施校の教師や学生・生徒が多く指摘している。「雰囲気や空気感」は、微妙な表情や動作などから直感的かつ総合的に判断される学習者の反応であり、画面から瞬時に把握することは確かに難しい。ただし、

これはオンライン授業自体の課題というよりも、実は、現行の授業における指導法の在り方に関する課題である。

旧来の一斉授業の多くは、図 1 のような指導と評価の流れを基本的な構造としており、図中③の「判断」も、教師が数名の解答から全体の判断を行うことが多かった。

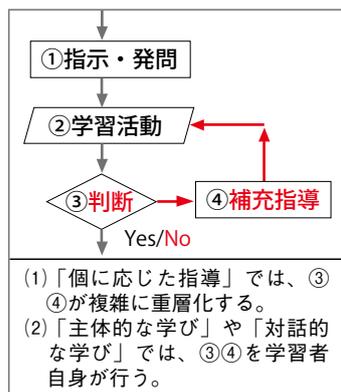


図 1 旧来の授業の流れ（イメージ）

しかし、近年では、個に応じた指導の必要性から、この流れは、③「判断」と④「補充指導」において重層化し、極言すれば学習者と同数の流れが必要となった。こうした状況では、学習評価を発問と解答だけで行うことは不可能であり、多くの教師が無意識的に、授業のあらゆる場面で「雰囲気や空気感」を捉えて学習評価の代替とする状況が生じていたと考えら

れる。すなわち、これは現行の「個に
応じた指導」の構造的課題が顕
在化したものである。

こうした課題の改善策として、
評価を行う場面の精選や思考・判
断の言語化・可視化などが推奨さ
れる。しかし、前記の指導の構造的
課題に加え、主体的・対話的で深
い学びの実現や教師の過重労働に
よる個別指導の減少等を勘案する
と、課題解決は極めて困難であり、
やはり授業で多くの「取り残し」
が生じざるを得ない状況にある。

以上の課題を解決し、個に応じ
た最適な指導を行えるようにする
ためには、オンライン授業と同
様のICTの活用、さらにはデ
ジタル教科書・教材や人工知能
(AI)の活用等による指導法の
抜本的な改革が必要である。

最近の国の動向

国は、Society 5.0時代に対
応するGIGAスクール構想を
進めてきた。その目標の一つが「誰
一人取り残すことのない、個別最
適化された学びの実現」であり、こ
れは「個に応じた指導」の構造的
な課題にも対応するものである。

現在、国は、「Withコロナ」
や「ポストコロナ」を見通し、
GIGAスクール構想を中心に、
「ハード」、「ソフト」および「指
導體制」について、以下のように
施策の推進を加速させている。

ハード面では、一人一台のPC
端末や高速回線の校内LANの整
備、家庭学習用の通信機器の貸与
などである。これらは、年度内整
備を目指して本年4月末に予算化
され、機器の不足等の課題解決を
図っている。

ソフト面では、学習指導要領の
コード化や学習履歴（スタディ・
ログ）の蓄積・活用などがある。
前者は、学習指導要領の全項目に
各16桁のコードを付与してデー
タベース化するもので、図2のよう
な活用を想定している。後者は、
個人のスタディ・ログを簡便かつ
継続的に蓄積し、大規模な分析を
して利活用を図るものである。並
行して、デジタル教科書の本格導
入やAI型ドリル等のデジタル
教材の活用も進められており、こ
れらを総合して「誰一人取り残す
ことのない、個別最適化された学
びの実現」を図る計画である。



図2 学習指導要領コードの活用例（教育データの利活用に関する有識者会議資料による）

なお、指導体制の面では、
ICT支援員の配置やクラウド
利用の統合型校務支援システム
の導入等による教職員の負担軽減、
著作権法改正の効果的運用などが
進められている。

学校教育に求められるもの

これからの学校教育には、「誰
一人取り残すことのない、個別最
適化された学びの実現」に向け、
次のような取り組みが求められ
ると考える。

各学校に求められるのは「児
童・生徒の基本的なICT活用能
力の育成」と「学習指導要領に

基づく系統的指導の充実」等であ
る。前者は、道徳科や関係各教科
の内容に既に含まれており、国や
教育委員会のWebサイトにも指
導事例や教材が提示されている。
これらを踏まえ、実際にICT
やデジタル教材等を授業で活用す
ることが重要である。後者は、「取
り残し」防止のために下学年の指
導事項を踏まえた系統的指導を展
開する取り組みなどであり、学習
指導要領のコード化に対応するも
のである。

これらの実施には、教育委員
会等における国と連携したPC
端末等の整備が求められる。
GIGAスクール構想による「学
びの保障」は、「ポストコロナ」
においても喫緊の課題である。

また、図2の学習指導要領コー
ドの活用やスタディ・ログの蓄積・
活用においては、デジタル教科書・
教材が大きな役割を担うと考えら
れる。これらのデジタル教科書・
教材についても、「個別最適化さ
れた学びの実現」に対応した内容
や活用法の改善・充実、さらには
各学校における積極的な導入・活
用が求められる。

オンライン授業とその課題

ポイント

- 「デジタルネイティブ世代」の対応力を支援するには、
 - ① 学生の通信環境の整備支援
 - ② 大学の通信環境の向上
 - ③ 「Meet」「Zoom」などの活用技術の向上
 - ④ 学修内容の構成の工夫が急務。
- 遠隔授業においては、「学びの場」としての空気感や臨場感を感じないことが予想以上に学びへのモチベーションに影響を与えている。「知のコミュニケーション」をどのようにに図っていくのが喫緊の課題。

遠隔授業の初期段階での状況

学生同士の直接的なかわりから相互に知的な刺激を受ける、グループワークでテーマについて討議するなどの当たり前の日常が、新型コロナウイルスの感染拡大によりキャンパスから消えてしまった。

本学は新型コロナウイルスの感染の影響を受け、4月20日から前期終了まで、「Meet」「Zoom」「YouTube」などを活用して遠隔授業を実施することになった。だが、本学の遠隔授業にかかわる環境は十分ではなく、Wi-Fi環境やサーバーの容量の問題が浮き彫りになった。授業中に『SNS学修支援システム（遠隔授業支援システム）』の機能の低下やダウンなどのトラブルが相次いだ。また、3月下旬から学生の学内



姫路大学教育学部こども未来学科
教授 長瀬 善雄

の立ち入りが禁止されたため学生のテキスト購入に時間がかかり、教員はテキストの一部をPDFでの送信や資料の郵送などの対応に追われた（現在は解消）。

遠隔授業の学生の受講環境と新たな気付き

本学の学生を対象に行った「遠隔授業の学生の受講環境について」のアンケート調査（2020年4月27日～5月12日に実施）では、ある学年では自宅でのネットワーク端末はスマートフォンのみが約5割、スマートフォンとPCまたはタブレット端末の両方での受講が約5割となっている（図1）。また、PDF資料などを印刷できる環境にある者の割合は約5割である（図2）。逆に言えば印刷環境のない

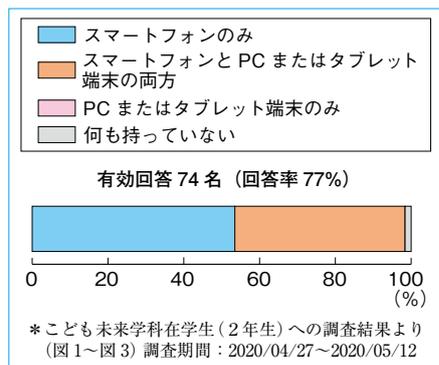
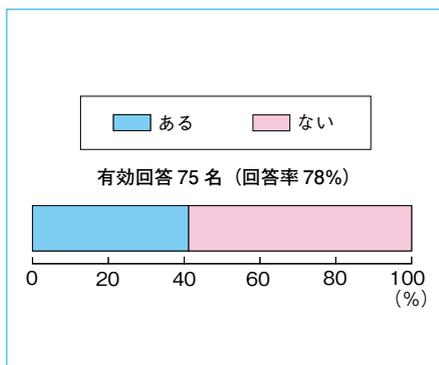
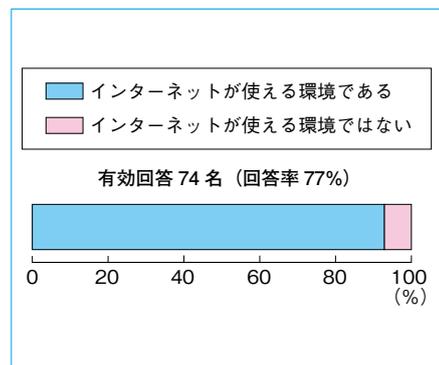


図3 『自宅にネットワーク環境はありますか?』

図2 『自宅にプリンターはありますか?』

図1 『自宅でネットワーク端末は何を使用していますか?』

学生が半数いるということであり、多くの学生はスマートフォンの画面上でPDFの資料を見て学修しているものと思われる。また、さまざまな理由で自宅でのネットワーク環境のない割合は、約1割程度、存在している(図3)。

このような状況下で学修内容の理解がどの程度、図られているのか危惧する。学生の中には、文字中心の『SNS学修支援システム(遠隔授業支援システム)』による授業が1日に4コマ、多い学生は5コマ受講する学生もいる。学修環境による集中力、学修意欲の低下の問題は心配である。授業後、オフィスアワーに寄せられた意見の一部を紹介する。「パソコンをもっておらず、スマホ1台での授業なので充電の減りが速い。『Zoom』などでの授業よりも『YouTube』などで動画を見直せるようにしてほしい」、また、別の意見として、『SNS学修支援システム(遠隔授業支援システム)』のタイムラインでの遠隔



授業を録画してYou Tubeへアップ

授業より、『Zoom』『Meet』でのほうが理解しやすい。でも、『SNS学修支援システム(遠隔授業支援システム)』のよいところは、後で、先生の言っていたことが確認できることです。」などさまざまである。また、学生側は、各教員のそれぞれから多くの課題が出されるため、その課題の作成に追われ、悲鳴をあげている学生も少なくないこともわかってきた。

本学での教員の授業方法は、『SNS学修支援システム(遠隔授業支援システム)』と『Meet』『YouTube』などを組み合わせて使用する例、『Meet』などを駆使している例、『SNS学修支援システム(遠隔授業支援システム)』中心などさまざまである。『Meet』などは慣れると通常の授業と同じような感覚になることもあるが、学生の反応を実感できず学生との心理的な距離が遠いと感じることも多い。『Meet』や『Zoom』などにおいても双方方向の授業を求めているが、画面共有機能を使った一方向的な授業になりがちである。『Meet』などを十分に使いこなしているとはいえず、技術的なスキルアップと学修内容の両面から授業を検討していかなければならないと感じる。

そういった中でも、この遠隔授業のよい点にも気付く。本学は前述したように『SNS学修支援システム(遠隔授業支援システム)』を利用している。こ

の機能を使うと学生は文字入力の手軽さもあって自分の考えを表現しやすく、また、教員は時間をおかずに学生一人一人の考えをその場で把握することができる。加えてそれが授業ごとに学修履歴として残っていくことも利点である。学生は学修履歴から自己の学修を振り返り、修正することも容易にした。また、学生のコメントの内容や課題への追究に対しても一人一人にすぐにフィードバックできる点も遠隔授業の利点である。オンラインでの授業がいつまで続くか見通せない状況ではあるが、遠隔授業での学修の質をさらに向上させていくには、以下のことが重要と考える。

①学生の通信環境の整備支援、②学内の通信環境の充実、③『Meet』『Zoom』などの活用技術の向上、④学修内容の構成の工夫などである。これらのことを充実させつつ、対面授業が通常に行われるようになった場合においても、遠隔授業(遠隔授業支援システム)の利点を対面授業に取り入れ、さらなる授業の質の向上に取り組む必要がある。

オンラインの壁

今、大学の講義はオンライン化されている。学生たちは幼いころからデジタル機器に囲まれて育った、いわゆる「デジタルネイティブ世代」のど真ん中

にいる。それゆえ、このような感染症による不測の事態にあってもオンライン化に何とか対応できているのである。一昔前であれば、ウイルスの脅威を前に、学問の場はなす術もなく閉ざされていたのかもしれない。だが、遠隔授業の試行錯誤の中で、受講環境の整備の問題、いわゆる「通信格差」の問題が浮き彫りとなっている。経済格差に基づく通信環境の格差がそのまま学修力の差につながる問題である。さらに、これとは別の問題も生じている。それは、「学びへのモチベーションの維持」という課題である。キャンパスの講義では、ほかの学生の学びの姿勢や教員とのやり取りも刺激となる。そうした「学びの空気」を遠隔授業では感じにくく、「学びの場」としての空気感や臨場感を感じないことが、予想以上に「学びへのモチベーション」に影響を与えている。オンライン授業においても「知のコミュニケーション」をどのように図っていくのか喫緊の課題である。

本学は、学生に対して新型コロナウイルスの影響による遠隔授業の学修支援として、「学修環境整備支援金(一律5万円)」を支給してネットワーク環境の整備を促した。また、スマートフォンからPCへの授業へ移行させるため、「Chronobook」200台を貸し出し、学修を支援した。

育できにくかったリーダーシップの養成が自然とできてきたことと、社員たちが住む地域での今後も含めた居場所づくりができたことにより、社内の活性化を図ることができたとのこと。まさに社会貢献を通して社会教育を実践されている好事例です。

子どもたちの健全な育成のために！

●「子ども応援シリーズ」書籍の企画・出版

子ども応援シリーズとして書籍を現在7冊刊行しており、今後3冊の出版が決定しています。シリーズ本としては20冊を目ざし、あらゆる分野・角度から子育て支援等に資する書籍を発刊していきます。

刊行された書籍については大型書店・アマゾンにて販売しており、公立図書館、大学図書館などにおいても購入していただいております。今後は病院の待合室、家庭教育支援センターなどの子育て中の保護者が集まる場所等を調査し、広報活動を行います。実際の活動において「子ども・子育て応援」企画第1弾として、昨年末にスポンサーでもある損害保険ジャパン殿からのご支援により、全国国公立幼稚園・こども園PTA協議会と連携し、四国・九州の500園に「子どもの未来応援シリーズ」の書籍各2冊を寄贈配布することができました。関係者からのお礼と温かいご支援の言葉をいただき、特に幼稚園長・保護者から当法人への励ましの言葉をいただきました。

「子ども・子育て応援」企画第2弾として「いじめ防止」の書籍を東京都のすべての区市町村の教育長、首長部局の子ども対策部局（社会福祉関係）に107冊を寄贈配布しました。



保護者・子どもたちを取り巻くリスクや、事故やトラブルを未然に防ぐために！

●個人情報保護法に対応する保険の企画・販促

平成29年5月30日の個人情報保護法改正により、個人情報取扱事業者に該当することになったPTAの万全な体制構築を支援するために、個人情報保護に関する諸規程の整備や、リスクを補完するための保険の企画等を実施し、公益社団法人日本PTA全国協議会と連携協力し、スケールメリットを生かした保険の広報・販売促進を行っております。

●PTA役員プロテクト保険の企画

子どもたちのために活動を積極的に行っているPTA役員のリスクマネジメントをサポートするため、弁護士会も採用している「プロテクト保険」とともに開発し、PTA活動が円滑に行われるのを支援します。

その他の活動について！

一般財団法人ジャパンアートマイルが実施している「アートマイル国際協働学習プロジェクト」（文部科学省、外務省後援、独立行政法人国際協力機構）事業を当法人として支援・協力（参加校約200校のうち姫路市・北九州市の36校を推薦・協力）を行いました。

東京オリンピック・パラリンピックの開催に伴い、前夜祭として社会に広く公表されることになりました（現在は延期決定により保留となっております）。

これからも、私たちは子どもたちの健全育成のため、子育て支援・大人の生涯教育のため、社会教育活動を通して社会に貢献していきます。

『子どもたちの無限の可能性のために！！』



URL <https://kodomonon-mirai.com/>

一般社団法人子どもの未来応援団とは

「子どもの未来応援団」は新しい時代を生きる子どもたちが、心身ともに健やかに成長を図るために、平成29年12月26日に設立された法人です。

子どもたちを取り巻く環境は、いじめ、不登校、虐待など、深刻な問題が山積しており、改めて「家庭・学校・地域」の役割と責任が問われています。

当法人は関係省庁・企業・大学・団体等と連携・協力して、子どもたちが安心・安全に、のびのびと育ち、未来を切り拓いていくことができる社会を目指して活動しています。

一般社団法人子どもの未来応援団 理事長代理 尾上 浩一

子どもの未来応援団の活動内容

社会教育の充実振興

- ・指導者養成および人材育成事業
- ・関係団体に関する支援事業
- ・図書出版事業 他

子どもたちの健全な育成

- ・青少年の健全育成事業
- ・地域コミュニティ形成事業
- ・家庭教育の支援 他

生命保険・損害保険事業

子どもたちの万が一に備える補償や、PTA運営に伴うリスクをカバーする補償を、開発・提供します。

社会教育の充実振興を実現するために！

●社会教育に関する指導者養成および人材育成

主に子育て中の保護者への支援、地域社会で子どもを育成していくための「大人の学び・子どもの学び」の支援を行っております。そのためには、ひとりひとりの意識も大切ですが、何より企業の理解が必要と考えています。

～企業のCSR活動から社員の子育て・家庭教育支援へ～

「働き方改革関連法」（働き方改革を推進するための関係法律の整備に関する法律 平成30年6月29日成立、7月6日公布）が平成31年4月1日から順次施行されました。その中で重要な視点は、社員の「暮らし方」・「生き方」であり、社員が仕事への意欲・充実感をもち、毎日、生き生きと働くことが大事であります。

そのため、当法人は育児と仕事を両立しなければならない社員（保護者）に企業が実施するCSR活動の一環として「子育て支援・家庭教育支援」の研修会等の応援を行います。

ここで一つ、実際にインタビューをさせていただいた博多中洲の明太子「ふくや」さんの事例を紹介させていただきます。創業の精神を、「社会に貢献

するには、時間とお金が必要」とし、社会貢献の形として「社員全員で中洲のドブ川清掃」を行っていたそうです。創業は昭和23年、当時の中洲は匂いや汚れがひどい川だったようで、まずはここから行動されました。

その後、現在に至るまでさまざまな活動が行われ、最近では社員が住む地元でボランティア活動を支援する制度を創設し、PTAや自治会等の役員になると会社から手当が支給され、またその活動が日中にある場合は、仕事として参画できボランティア活動を通して地域への感謝の形を示されています。

この活動をはじめてから会社にも思わぬ変化が現れ、地域での率先した活動が普段の仕事の中では教

「大人の学び、保護者の学び」講師派遣事業概要

～社会教育振興及び家庭教育支援～

子どもの未来応援団では、活動に賛同・応援いただける教育分野の有識者を「支援アドバイザー」として登録を進めており、現在120名を超えています。「支援アドバイザー」を講師として派遣し、地域社会の活性化に寄与するとともに、社会教育の充実・振興を図ります。また家庭教育支援のための企業内研修や家庭教育支援センターにも積極的に講師を派遣いたします。

講師派遣の流れ

1. 講演のご相談・ご依頼
2. 講師の選定・ご提案
3. 講演会の準備・実施
4. ご精算



「もしも」で考える コロナ禍の先にある学校

東京都江東区立明治小学校 統括校長 喜名 朝博
(全国連合小学校長会会長)



新型コロナウイルスへの対応を通して、これまで見えなかった学校のさまざまな課題が明らかになってきました。ポストコロナ時代になっても、過去の学校の姿に戻すわけにはいきません。今のうちに新しい時代の新しい学校の姿を描き、発信していく必要があります。「もしも○○だったら」と考えると、その姿が見えてきます。

1 もしも20人学級だったら

分散登校でクラスが半分だった頃、授業がスムーズに進みました。人数が少ないので話したり発表したりといった機会が増えたことが要因です。そもそも20人学級だったら分散登校は不要でした。個に応じた指導の時間も十分に確保でき、学力保障につながります。さらに、学級事務も半分、学校における働き方改革も進むはずです。

2 もしも教室がもっと広かったら

新JIS規格になって児童机は一回り大きくなりましたが、教室の広さはずっと変わっていません。高学年の教室では机間指導もままならない状況です。20人学級ならちようどいいかもしれません、同じ教室の中にグルー

プワークのスペースがあれば、多様な学習活動が展開できます。また、教室内に水道設備があれば、手洗いに列を作ることもなくなります。

3 もしも一人一台に端末があつたら

GIGAスクール構想が早期に実現し、すべての子どもに一人一台の端末が貸与され、授業だけでなく家庭学習にも活用できていたら、今になってこんなに焦ることはなかったことでしょう。授業では発表や意見交換、調べ学習のツールとして、家庭では最適化された問題が提供され、習熟を図ることができます。不登校や病気療養、何らかの事情があつて学校に来ることができない子どもたちとも、対面と遠隔のハイブリッド型授業によって学びを保障することができます。

4 もしも高速大容量通信網が整備されていたら

すべての学級で同時に回線を使って通信状況に影響しないような高速大容量回線が必要です。また、子どもたちが端末を持ち帰っても、学区域をカバーする通信網が整っていれば、家庭の通信環境に依存することなく、遠隔

授業やオンデマンド学習がストレスなく進みます。

5 もしもデータの一元管理ができていたら

校門を通るとICチップにより登校時刻が打刻され、カメラの前に立つと自動で検温し、データが学校のサーバーに転送される。担任はタブレットでデータを確かめ、本人を見ながら健康観察をしていく。健康情報だけでなく、学習履歴(スタディログ)も蓄積されることで、個別最適化された学びも実現していきます。また、保護者と共有することで通知表が不要になるかもしれません。

これは「もしも」の話ではありません。世界のどこかの国ではすでに当たり前に行われていたり、それを実現しようとしていたりしています。OECD諸国の中で教育の公的支出の割合が最下位を続けている日本。もしも3位以内に入っていたらこんなはずではなかったかもしれません。ウィズコロナの間に本気で取り組み、実現していかなければ、世界から取り残されてしまいます。🌱

コロナ危機を教訓に

東京都八王子市立第七中学校 校長 三田村 裕
(全日本中学校長会会長)



新型コロナウイルスの感染の拡大を防止するため、ほとんどの学校で3か月前後の臨時休業措置が取られた。学校は再開したものの、感染リスクが0になっただけではなく、新しい生活様式を意識しながら教育活動を模索する日が続いている。

コロナ禍という言葉が用いられるように、まさにわざわざいであるのだが、こういう困難に直面したからこそ得られたものも実は多い。

1例を挙げると、臨時休業期間中に学校ホームページ等を使って家庭に配信した動画がそれだ。最初は、児童・生徒が少しでも家で学習に取り組みめるようにという思いで始めた学校が多かっただろう。しかし、制作を重ねるうちに動画の中身も作成の技術も向上し、児童・生徒に学びを保障するためのツールといえるレベルまで向上した完成度の高いものが多く出てきた。

学校が再開し、こうした動画もその役を終えるかと思っただが、今も授業で使用している教員がいる。それぞれどこか、動画の制作を今も続けている教員もいる。聞くと、学習のポイントを短い時間に凝縮してまとめた動画は、生徒にとって理解しやすく授業で用いると効果的なのだそうだ。また、今も制作し続けている教員は、今後も制作を続けライブラリー化できれば、補教や

補習にも活用でき、さらには不登校等長期欠席の生徒に対する学習支援にも活用できるからだと言う。そして何より、こうした動画を制作することが、教材を深く理解することにつながるのだそうだ。うなずける話である。このように、コロナ禍によって始めた動画制作一つをとっても、今後に向け多様な可能性を秘めているのだ。

得られたものは学習指導の面だけではない。学校における働き方改革を推進する上でヒントになるものも幾つもある。



なり早い時期から自宅に切り替えた。年度末・年度始めという最もさまざまなことを決め確認し合う時期、しかも教育課程を再編成する必要もあつたにもかかわらず、教職員が一堂に会する機会は極めて少ない。さまざま支障が生じるのではと危惧する声もあつた。

しかし、不自由も問題も全くなかった。教職員集団の情報共有や意思疎通、合意形成等は、学校が作ったメンバーリストを用いたやり取りで十分でできたのだ。たまたま本校ではペーパー化の取り組みを始め、起案から決裁に至る流れも、また会議を行う際の資料もすべて電子データを用いるようにしていた。それが幸いしたというのもあるだろう。しかしそれがなくとも、資料を人数分印刷し、それを綴じ、できあがったものを配布した上でようやく会議を始め、さらに時間をかけて議論してと、共通理解や合意形成のためにこれまで行ってきたことを全くせずに進められる。これを全教職員が実感したことは大きかった。

コロナ禍により、学校はさまざまな対応を余儀なくされた。しかしこういった対応の中には、今後に生かせるものが少なくない。「ピンチをチャンスに」。この数か月間、各校が懸命に取り組んできたことの意義を一つ一つ振り返るのではないか。

全国各地のさまざまな取り組みを紹介します。

着任当初、授業妨害や器物破損、ネット上でのトラブルや自転車の盗難など、毎日のように、生徒の問題行動が多発する学校でした。授業でも「学ぶ」価値が見出せず、常にクラスの中で、数名は机の上に伏せて授業から逃避し、結果として学力も非常に低い状況でした。その状況を何とか打破し、「自分らしさ」を発揮でき、「学ぶ」価値を実感できる学校にしたいと考え、さまざまな変革に着手しました。ゼロベースでの本校の生徒指導の見直し（「三中 School Standard」の確立）、「朝読書」の実施、「キャリア教育」の見直し、「学ぶ者としての謙虚さを身につけさせる指導」の徹底など。ただ、その変革の中で、一番重きを置いたのが、学校生活の大半を占める「授業そのものを変える」ということでした。それが「学びの共同体」の考えに基づく、「協同的な学び」の導入だったのです。「授業改革を中核に据えた学校改革」今、その取り組みから3年が経過しました。学習面でも、



教育調査研究所では、令和2年度「小・中学校における言語能力育成の現状と今後の取組について」をテーマとして調査研究等を行った。その結果から主な内容を紹介する。

児童の言語に関する意識調査からは、児童の言語能力の育成の要となる国語の学習に関して、国語の勉強が「好き」である子どもは言語活動を好むことや言語能力が自分に身についていると認識する傾向が強いことがうかがわれた。このことから国語の学習に関しては、児童に言葉に関する興味・関心をもたせ、それを大切にしながら学習を進め、学習したことのよさを実感できるようにすることが求められる。子どもは話す・聞く、書く、読むなどの言語活動にそれぞれ好みがあることから、個々の特色を生かしながら国語が好きになるような指導の工夫を大切にしたい。

言語能力育成に向けた教師の指導力に関してはおおむね良好の学校が多いが、学校差があることがうかがえる。学校の言語環境については、小学校で約6割、中学校で約5割が課題がある

行動面でも、生徒の変容がはっきりと目に見える形で表れ始めました。その結果、昨年は道内各地から、200名を超える教育関係者の方々にご来校いただき、1月には、「文部科学大臣優秀教職員組織表彰」という評価までいただくこととなりました。

「授業を変えれば、学校が変わる」そんなこと本当にできるのだろうか、当初は半信半疑でした。でも、それを実際に目の当たりにし、生徒の変容を実感する中で、あらためて「授業」の大切さを痛感しました。「一人残らず、すべての子どもたちの学ぶ権利を保障する」ことを目指す授業のあり方。仲間と共に学び合うという学校でしかできない「学び」の徹底。その「当たり前」のことを、今一度「教育観」のレベルから見直し、全教職員一丸となって取り組めたこと、本当に「教育」の奥深さと可能性を感じました。



北海道

「協同的な学び」への取り組み
授業が変われば、学校が変わる

新ひだか町立静内第三中学校 校長 盛永 明寿

ことがわかった。課題として児童・生徒の言語そのものとともに、教師の言語環境としての在り方が多く指摘されていた。読書環境に関しては、学校図書館の整備不良、予算不足、蔵書の少なさや古さなどが多くあげられていた。また、教師の読書の重要性への認識のなさや教師自身が読書していないなど、読書環境としての教師の在り方に課題があることが指摘されていた。教師は自らが言語環境の重要な柱であることを認識し、言語環境の改善に努めることが必要である。読書環境には、家庭・地域との連携や教育委員会の支援が必要であることも課題として指摘されていた。

このほかに研究紀要には、言語能力育成・言語活動充実のポイント、研究実践校からの提案や学識経験者からの提言をいただき掲載している。あわせて参考にさせていただきたい。

『小・中学校における言語能力育成の現状と今後の取組について』B5判、107頁。問い合わせ先 03-3520-2970



東京

『小・中学生における言語能力育成の現状と今後の取組について』報告
小中学校子どもたちと先生方のアンケート結果から明らかに

一般財団法人 教育調査研究所 研究部長 寺崎 千秋

大阪

教科横断で取り組む海外研修

金光八尾中学校 校長 中原 敏博

本校では2021年より中学3年生の修学旅行を国内から海外に変更し、オーストラリア（ケアンズ）海外研修として、3泊5日を実施することにしました。この研修では海外での体験や会話を試すだけでなく、事前学習の中でグローバル社会が求める新しい学力を育成するため、教科横断的な学びをめざしています。

本校では以前から校外の体験型英語学習施設を利用していますが、生徒たちが生き生きと英語に親しむ様子を目の当たりにし、環境を整えることで積極的に、また主体的に英語を使えるのではないかと考え、「中学生という吸収力の旺盛な時期に、海外に学びの場を求めることで、探求学習がめざすような幅広い学びにつなげたい」と、教員より海外研修が提案されました。具体的な指導では、英会話の充実だけでなく、社会科や国語科、理科でのオーストラリアの文化や自然の学習、日本や地元八尾市の文化や歴史の学習、数学科での通貨換算の学習、また、各教科でのプレゼンテーションなど、各教科でできる指導を検討し、海外研修までの2年半を指導することにしました。

今までの各教科の縦割り指導では、幅広い視野の育成に対して一定の限界を感じていた教員が、主体的に対話的な深い学びをめざし、教科横断でのグループワークに取り組むことになりました。また、放課後にはネイティブ教員を活用し、学年の枠をこえた英語好きな生徒が一つ

のテーマのもと、少人数で意見交換できる機会もつくりました。2年生では、オンラインでの双方向ビデオ会議システムを利用して、海外とつなぎ異文化交流をします。そして、海外研修のまとめとして保護者も参加する報告会で、生徒自身の体験を英語でスピーチすることで研修を終えます。

この機会を通して、学校の教育目標としている学力の向上とともに豊かな心をもった人間として成長できるよう願っています。



南から



Society5.0時代の担い手となる子どもたち1人1人端末環境が、全国規模でようやく実現しようとしています。

本校は、平成22年9月に総務省フューチャースクール推進事業実証校として、児童1人1台のタブレットPC、無線LAN環境が整備され、以来今日まで活用を継続し、11年目を迎えます。コロナ感染症対応のための臨時休業中には、1人1アカウントのオンライン学習に着手しました。

今年度スタートした学習指導要領において、情報活用能力がすべての学習の基盤となる資質・能力として位置付けられ、小学校でのキーボード入力学習は必須となりました。

本校では、中学年からローマ字入力練習をカリキュラムに位置付け、鍛えています。年に3回、「キーボード選手権」というイベントを開催し、1分間に何文字正しく入力できるか競っています。

今年度1回目のキーボード選手権を7月初旬に開催し、4年生以上の児童が全員参加しました。結果、4年生平均5.3文字、5年生平均13.9文字、6年生平均19.1文字。6年生の最高記録は、1分間に72文字でした。

本校の研究テーマは、児童の情報活用能力の育成です。上述の情報手段の基本的な操作だけでなく、問題解決・探究における情報活用、情報モラルと、バランスよく育成できるよう、手

立てを講じています。

中でも、問題解決・探究における情報活用スキルとして定めているのが、「身につけようかくスキル11」と「身につけよう学びのスキル11」です。「書くことは考えること」というコンセプトのもと、問題解決の過程（情報収集—整理—分析—まとめ—表現）に、「かく（書く）活動」を位置付けています。また、「身につけよう学びのスキル11」は、学習場面だけでなく日常生活においても情報活用を意識できるようにと作成したものです。



広島

1人1台情報端末活用11年目!! 情報活用能力育成を目指して

広島市立藤の木小学校 校長 島本 圭子

アートの「わからなさ」について —アートと教育 ③—

「知ることは愛することだ。知ることがひろければ、
— そう、愛することも深くなる」～レオナルド・ダ・ヴィンチ～*

埼玉画廊 竹内春香

「アートはよくわからない」といわれることがしばしばあります。黄色に黒い点々のカボチャ、落書きのような絵画が百億円以上で取引された、アメリカのアートフェアで（生の）バナナ一本が展示され約一千万円で売れた、オークションで落札された作品が直後にシュレッダーで裁断されたなど、確かに人々を混乱させるファンタジーの側面があることは否めません。

この「わからなさ」は何かというところ、おおよそ三つの意味があるようです。①作品（描かれているもの、作られたものそのもの）が何なのかわからない。②なぜそんなに高いものなのかわからない。③①と②を受けて、だから興味がもてない、といったようなものかと思えます。

① 作品が何であるのか。これは、私たちが普段の生活で目にするような具体的な物や風景、人でない場合によく聞かれますが、アートにふれる上で一種の心のバリアだと私は考えています。確かに、現代のアートの概念はとても幅広く、美しいかどうかは多くの尺度の一つに過ぎず、抽象的な作品やコンセプトチュアルな作品など、何をもってよいとするのか、拒否反応が起き



2019年6月 埼玉画廊での展示風景（作家 左から 笠井誠一、遊馬賢一、高梨芳実、大庭英治）

てしまうのも無理はありません。しかし、花鳥風月、リンゴや積み藁など、具体的なモノや実在する風景でも、作家はモノの美しさを描こうと思ったのか、苦楽を共にした生活の記録の意味があつたのか、そういう観念的なものを排除して純粋な芸術作品の独立性を追求した結果なのか、その心はさまざまです。同様に、一見ただ何をして表したのかからしない作品でも、時代を批判していたり、生きづらさであったり、テクノロジーによる新しい表現であったり、作家が生きている世界を知る、つまり作家が何に心を動かされて制作したのかを知ることが、根本的にどんなアート作品にでも共通して大切なのではないのでしょうか。作品と鑑賞者の間に、共感する部分と謎めいた部分があることこそ、その作品が自分にとって深いものになっていきます。「わかる」ことはそれほど大切ではなく、「わからなさ」を受け入れ、楽しむ。そこに感動が生まれれば、それは自分にとって価値あるものです。また、鑑賞するだけでなく、時には実際に自分で「アートなもの」を作ってみるのも

よいでしょう。無意識のうちに自分で考えているものや感じていることがクリアになり、「そういうことか!」とアートがより身近になるでしょう。

続いて、②なぜそんなに高いものなのか。美術作品の値段は、作家の経歴や評価、希少性や来歴等で決まりますが、しばしばニュースになるような数百億円という取引は、一種のショーである面は否めません。私どものような商売をしている者にとってみれば、正直夢のある話ではありませんが、芸術的価値と金融商品としての価値は別と考えます。

今や、夏目漱石などの文学作品は無料で読むことができますが、それは漱石の作品に芸術的価値がなくなつたということでしょうか。言わずもがな、答えは否です。アートとお金の関係は良い悪いではなく、願わくば、真の芸術的価値のわかる感覚を磨いていきたいものです。

もしも「アートはわからない」と思っている人がいたら、以上のように心のバリアを外し、少しでも興味をもってくれるものになり、アートを愛し、人を愛することにつながること願っています。

（*伊藤廉『絵の話』株式会社美術出版社1983年）

竹内春香

埼玉画廊(有限会社エスパス・ミュウ)専務取締役。
1980年、埼玉県生まれ。慶應義塾大学経済学部(島田晴雄研究室)時代には体育会女子バレーボール部で汗を流す。2005年、慶應義塾大学大学院政策・メディア研究科修了後、日本放送協会(岡山放送局)に勤務(ディレクター)。2014年より現職。博物館学芸員資格も取得している。一男一女の母。

学級経営に生かす 「小さな道徳授業」



愛知教育大学教授
鈴木 健二

「小さな道徳授業」とは

「小さな道徳授業」とは、5～15分程度の短時間で行う道徳授業である。「教材＋発問」というシンプルな授業構成なので、身近な素材を活用して、誰でもつくりることができる道徳授業である。

授業づくりのポイントは次の2点である。

- ポイント1 興味をもたせる教材提示を工夫する
- ポイント2 思考を刺激する発問を工夫する

素材は、新聞、絵本、ポスター、子どもの姿、身近な人の姿、貼紙、テレビ番組、漫画など、身近なところからたくさん発見することができる。

短時間でできる道徳授業なので、朝の会、帰りの会、学年集会、全校朝会、道徳の時間との連動など、さまざまな場面での活用が可能である。

しかも、教師が感動した素材を取り上げるので、子どもたちの心に響きやすく、学級経営により効果をもたらすことが期待できる。

「小さな道徳授業」の例

「小さな道徳授業」の例を示してみよう。

素材は、新聞のコラムで紹介されていた次の言葉である（「ことば巡礼」宮崎日日新聞2011年2月17日）。

「できる」「できない」は、人が決めるのではなく自分が決めるものです。

次のような授業プランを構成した。

「できる」「できない」を空欄にして入る言葉を予想させたあと、「できる」「できない」を提示し発問する。

発問1 この考えに賛成ですか。

話し合ったあと、コラムの次の言葉を示す。

※「できる」と思って実行すればできることでも、「できない」と決めつけてトライしなければ、すべてはそこで終わってしまう。

発問2 「できる」と思って実行すれば「できる」のでしょうか。

発問3 「できない」と思ったらそこでやめた方がいいですね。

発問4 これから、この言葉をどのように生かしていきたいですか。

学級経営に生かす

この「小さな道徳授業」のねらいは、以下のとおりである。

自分で「できない」と決めつけてしまうと、すべてはそこで終わってしまうことに気付かせ、難しいと感じても「できる」と思って挑戦しようとする意識を高める。

このような意識が高まると、いろいろな困難にぶつかったときに、それに立ち向かう子どもの行動が変わってくる。また、学級全体で価値観を共有しているため、お互いが励まし合ったり、支え合ったりという行動も表れてくる。

「小さな道徳授業」が学級経営に生きるのである。

「15分でできる 小さな道徳 教材集(サンプル版)」のお知らせ

道徳の授業はもちろん、朝の会、帰りの会、学年集会、全校朝会、学校行事などさまざまな場面で活用できる「小さな道徳」の教材集を公開しています。「きこえる幸せ」「ほめる力」「伸びない人は、いない」など、子どもたちの身近な素材を活用した授業プランを掲載しており、「小さな道徳」にすぐに取り組むことができます。

小さな道徳 教育出版 検索 https://ssl.kwc.co.jp/ks_dotoku/



ID:guest PASS:guest

本誌「コラム」のイラストを長年ご担当いただいた双子のイラストレーター。北陸でご活躍するお2人をご紹介します。

ひらたゆうこ・HISA (ヒラタヒサコ) さん

ひらたゆうこ

子どものころからの思い

「絵の道で生きていきたい。」中学生の私の心に、浮かんだその気持ちは、今も私を動かしています。
子どものころから、絵を見ることも、描くことも大好きでした。絵本を開くと、絵が自分に話しかけてくれているように思うのです。勉強をやりたくない日も、教科書の挿し絵を見ていると、心がワクワクしてくるのです。芸術的な大きな作品に感動するというよりは、生活のなかにある小さくて近くにくれてくれるようなイラストにとても魅力を感じていました。「私も絵で誰かに会いたいな。」という漠然とした思いは、次第に「絵の仕事がしたい。絵の道で人と出会いたい。」という現実的なものになりました。



として少しずつご依頼をいただくようになり、双子の妹と一緒に、絵の活動を広げていきました。30代は、互いに子育てをしながら、自分のペースで個々の活動をするようになりました。

うれしさが必要

教育出版様とご縁をいただいたのは、20代後半。そして、2007年に『Educo』のコラムイラストをご依頼いただき、姉妹交互で担当させていただいてからはもう13年が経ちます。先生方のコラムは、専門的な内容であり

ながら、子どもたちが学びながら充実した日々を送れるように…という思いがあふれています。イラストには、その思いの部分を表現できるように心がけながら描いていました。私の子ども時代は、あまり勉強を熱心にしておらず、反省ばかりですが、でも、苦手な問題を解けたときの喜びや安心はしっかりと覚えています。勉強にも「うれしさ」は欠かせないと思います。私は、子どものころに絵を描いて、親に見せると、とても喜んでくれました。決して、上手だった訳ではありません。ただ、自分の描いた絵を見て、なんて楽しい世界だと目の前の人が喜んでくれるうれしさが、何度も何度も描くのです。なので、きつと少しずつ上達したのかもしれない。子どもの絵は、心の表現。心を見せて、自分を認めてもらうことと同じです。

大人から子どもへ…

私は今まで、ワークショップ等でたくさん親子に出会いました。お家の方は、お子さんに好きなことをさせたくてこの場に連れて来られますが、たまに「絵ばかり描いて将来が心配です。絵なんて描いても…」とおっしゃる方がいます。お家の方は喜んでいてるのではなく、困っておられるのです。子どものことを真剣に考えての悩みだなど、理解できません。ですが、子ども時代に、費やした時間がすべて、将来の仕事に役に立たなくては、それは無駄な時間なのでしょうか。どのようなときも、自分の心が豊かでないと幸せにはなれません。だから、私は、「宿題してほしいときは、絵を描くのがダメではなく、先に宿題をすれば絵を描く時間がたくさんできるよ。」って、伝え方はどうでしょう。そして、ぜひ「描くことで、あなたの人生はとても豊かになるよ。」と声をかけてあげてほしいと伝えます。絵に限らず、子ども時代に夢中になった時間は、心の奥で、いつまでも自分を支えてくれます。それは、必ず「生きる力」へとつながっていくと私は思っています。

HISA (ヒラタヒサコ)

私は、現在、金沢のアトリエで「青い世界」を中心に絵の制作をしています。今年からは、純金箔も青い絵に加わりました。青は、私たちを包み込む命の根源の色であり、寒色系なのに暖かいと感じる人が多く、懐かしい気持ちにもしてくれる不思議な色です。金という色も、貴金属を身に付けない私には、縁遠いものですが、今は、大地に…そして、私たちの中にある色であると感じています。



アトリエでは、毎月一度、大人も子どもも一緒に絵を描く「チャイルドティーチャイの日」を開いています。娘たちとの日々や、アトリエに通ってくれる子どもたちとの関わりや、20年以上、即興絵本作りの講座を各地で開かせていたなかで「子どもたちは、未熟な存在ではなく私たちの先生である」という思いを強くしました。そして、チャイルドティーチャイは、自分自身のなか